



江戸時代の町並みが残る商家町

五條新町

五條新町の町並み

江戸時代から明治・大正・昭和初めの町家、
そして近代建築まで・・・
いろいろな歴史的な建物に出会える町

慶長12年(1607)に建てられた栗山家住宅(重要文化財)を筆頭に、漆喰で塗り込められた重厚な江戸時代の町家が軒を連ねる五條新町。江戸時代初めまでに成立した町割りを良く残し、以後、明治・大正・昭和と4世紀にわたって営まれ続けた町並みがここにあります。

■ 起源の異なる二つの町並み



五 條

五條の町並みは、中世に起源をもつ御霊神社御旅所(昭和30年代の国道拡幅のため現在地に移転)を中心に広がった道筋に、間口と奥行の異なる地割りが施され、大規模な町家が面的に広がっています。五條では江戸時代初頭に伝馬所、寛政7年(1795)に代官所が設置され、南大和の政治経済の中心地として栄えました。

新 町

新町の町並みは、近世初頭、すでに町場として栄えていた五條村と二見城のあった二見村をつなぐように、城下町の一部として築かれました。吉野川北岸を並行に通る旧紀州街道(伊勢街道)沿いに、間口と奥行のそろった敷地割りをもち町家が、真っすぐに並んでいます。二見城の廃城後も、商業を基盤とした街道の宿場町として発展しました。



■ 五條新町の町家の特徴



江戸時代のつし二階建の町家



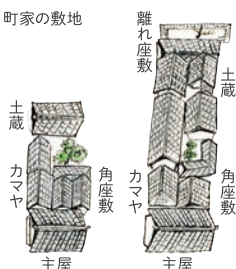
昭和初期の本二階建の町家

五條新町の町家の主屋には、二階の高さの低いものと高いものがみられます。低いものは江戸時代のつし二階建(二階は物置)で、明治時代以降、二階を高くして部屋を設けた本二階建が現れます。

屋根は切妻造の棧瓦葺が主流ですが、角地には入母屋造もあり、江戸時代の町家では本瓦葺もみられます。

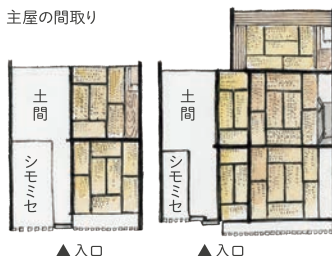
主屋の表構えは、格子が多く用いられていますが、江戸時代にはスリアゲ戸や蔭戸が主流であったとみられています。二階は江戸時代では虫籠窓や鉄格子窓で、明治時代以降に格子窓やガラス窓が現れました。

町家の敷地



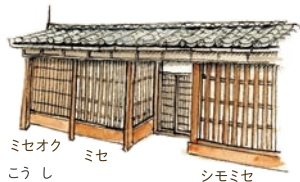
主屋は、街道に面して間口いっぱい建てられ、中庭をはさんだ敷地の奥には、離れ座敷や土蔵が配置されています。

主屋の間取り



主屋の間取りは、敷地の奥に延びる通り土間に沿って、部屋を一系列に二室から四室並べるものと、二列に四室から六室配置する場合がみられます。

町家のデザインあれこれ



ミセオク
こうし
格子

町家正面の開口部には、格子が多く用いられています。格子の種類には、太格子・細格子・親子格子(太さが違う格子を交互に配置したもの)など様々なものがありますが、これらは部屋の使用や格式によって使い分けられています。五條新町の町家では、通り土間の上手のミセ・ミセオクには細いもの、下手のシモミセには太い格子を用いることが基本です。



むしこまど
虫籠窓

つし二階の正面の窓には、縦格子を漆喰で塗り込めた虫籠窓が多くみられます。虫籠に似ていることから名付けられたこの窓は、四角形のものが多くみられますが、四隅に少し丸みをつけたものや木瓜形と呼ばれる形もあります。



そでかべ そでうだつ
袖壁(袖卯建)

町家の中には、袖壁と呼ばれる二階正面の両側に作られた漆喰壁を持つものがあります。袖壁は隣家への延焼を防ぐためといわれていますが、装飾的な要素も大きいと考えられます。中には二段に瓦葺の小屋根を設けた立派なものもみられます。



はしらがた
柱形

二階壁面の両端を漆喰で厚く塗り込めて、柱の形を作り出したものです。彫刻を施した装飾的なものもみられます。



しとみど
スリアゲ戸・部戸

江戸時代の町家(商家)の一階正面は、商いをするために全部を開放できる仕組みになっていました。現在は格子が一般的ですが、かつては柱の溝に沿って板戸を上げ下げするスリアゲ戸、跳ね上げた板戸を金具にかけて開け放つ部戸が多く用いられていました。当時は、これらの板戸を建て込めば室内は真暗に、開ければ全開の店構えとなっていました。



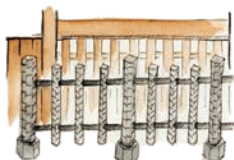
いしがき
石垣

街道と並行して流れる吉野川には、地区を横断するように西川・東浄川・寿命川の三つの川が注ぎ込んでいます。これらの川が氾濫し、たびたび水害に襲われた記録が多く残されています。この水害を乗り越えるために築かれたのが、河川の護岸や石垣です。石垣には、玉石を野面積みにしたもの、切石を乱石積みにしたもの、の二種類がみられます。



けむりだ
煙出し

かまどの煙を出すために、屋根の上に設けられた小屋根をいいます。



こまよ
駒寄せ

人馬の侵入を防ぐために、軒下を囲った柵を駒寄せと呼びます。六角柱の栗の木で、なぐり(ちょうななどの工具で表面を凹凸に加工したもの)仕上げが施されています。

町並みを散策すると、不思議なデザインに出会えます



鬼瓦(尉と姥)

目立たないように…
郵便ポスト



壁に埋め込まれた
剣道の面金



見かけは近代建築、
中身は江戸時代の町家



町並みに調和した看板

五條新町について

東西約900メートルにもおよぶ新町通り(紀州街道)に足を踏み入れると、銀色に輝く瓦屋根と漆喰壁に覆われた格子構えを持つ町家が現れ、それらが一直線に軒を連ねる風景が目に入ってきます。

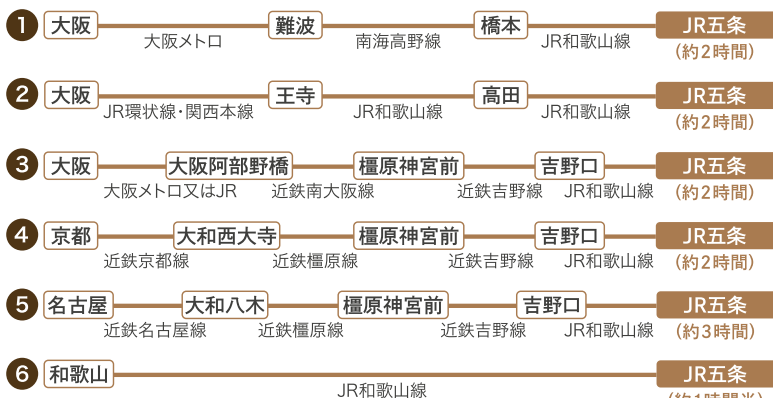
この町並みは、江戸時代初めの慶長13年(1608)、関ヶ原の戦いの功績によって、一万石余りの大名として二見城に入った松倉重政が城下町の一部として築いたことに始まります。重政は、二見城とすでに町場として栄えていた「五條」とを結ぶ地域に、間口と奥行のそろった町割りをして、新しい町、「新町」を築きました。そして「諸役免許(諸税を免除)」をすることによって、この地に多くの商人を集め、新町が商いの町として繁栄する礎を築きました。

重政は元和2年(1616)、肥前国(現在の長崎県)日之江城へ転封となって、二見城は廃城となりますが、その後も新町は商業を基盤とした紀州街道の宿場町として、南大和の政治経済の中心地として栄えた五條とともに発展しました。

五條新町の町並みは、度重なる火災や水害を乗り越えつつ形作られてきました。火災による延焼を防ぐために、耐火性に優れた漆喰で軒裏まで塗り込めた重厚な町家がつくられ、吉野川の氾濫に備えるために、川沿いには石垣が築かれました。このように先人たちの様々な工夫によって、守り受け継がれてきた結果、江戸時代初めまでに成立した町割りとともに、江戸時代の町家や明治・大正・昭和初期の町家・洋風建築など、400年にわたる多様な町並みが今に残されています。

町並みを歩くと、様々な顔を持つ町家に出会うことができます。二階の高さの低い町家、黒漆喰壁に立派な袖卯建を持つ町家、虫籠窓のある町家、虫籠窓の形も様々。同じように見える格子もよく見ると種類は様々。古き良き日本の歴史的町並み「五條新町」をゆっくりとご堪能ください。

電車でお越しの場合



五條市観光協会

TEL.0747-22-4001
〒637-8501
五條市岡口1丁目3番1号



gojo.ne.jp/g-kanko/

お車でお越しの場合

